近世建仁寺門前蛭子社における参詣空間の成立について

—18世紀後半の普請計画を通して—

ON THE FORMATION OF THE SPACE FOR WORSHIP IN THE PRECINCTS OF
EBISU-SHRINE LOCATED IN THE KENNIN-JI MONZEN AREA—Through the site plans from the latter half of the 18th century—

小出 祐子*

Yuko KOIDE

Ebisu shrine, located in the Kennin-Ji Monzen area, was famous for the god of wealth in the Edo period. However being under financial pressure, it was difficult to maintain this shrine in those days. To break such a condition, the parishioners planned to get more money offerings in the latter half of the 18th century. As a result, a new festival “Toka Ebisu” has been held in Ebisu shrine and the exterior of the main building of this shrine was made honorable to attract more people who visit the shrine and make monetary offerings to win the favor of the god.

Keywords : *Ebisu shrine, 18th century, KENNIN-JI archives, Toka Ebisu, Space for worship, god of wealth belief*

蛭子社, 18世紀, 建仁寺文書, 十日えびす, 参詣空間, 福神信仰

はじめに

京都東山の一帯は、清水寺、祇園社などをはじめとして数多くの寺社が点在し、古来より人々の信仰、参詣の場とされてきた。中世に入ると、栄西のもたらした臨済禅によって当地には五山の禅刹が次々と寺地を得て成立するが、その嚆矢として13世紀初頭、建仁寺は鴨東と称される鴨川の東域に伽藍を構える。近世にいたり、五山の各寺が幕府の庇護を失い衰退の一途をたどるなかで、建仁寺では伽藍を中心とした寺内周辺の寺領(境内)の開発が寺院経営の一手段としてとられ、領主による積極的な宅地造成が遂行されていく。

筆者はこれまでに近世建仁寺境内の開発をとりあげ、開発の背景にある逼塞した寺院財政の実状¹⁾や、開発地における宅地経営の収益効果に関する考察²⁾をすすめてきた。境内開発という行為を通して近世寺院の経営維持活動のあり方を追及したこれらの研究成果をふまえ、本研究の目的は、こうした成立事情をもって展開した近世建仁寺境内の実態を明らかにする点にある³⁾。寺院の境内が様々な領域によって成立していたことはすでに指摘されるところであるが⁴⁾、建仁寺においても江戸中期の急速な新地開発の結果、境内には町地をはじめ、寺社、藪地などによって構成される景観が創出された⁵⁾。そして、これら境内に散在する寺社＝宗教施設について、境内に成立した地域社会との関わりの中で検討を加えることは、多様な要素を包含する寺院境

内の性格をとらえる上で看過できないものであると考える。

そこで本稿では、寺内の門前に鎮座し⁶⁾、建仁寺境内に居住する人々の産土神として信仰を集めていた蛭子社(現恵美須神社⁷⁾)をとりあげ、18世紀以降の鴨東の発展と軌を一にして形成されていく当社の参詣空間について考察する。蛭子社は、福神「エビス」を祭祀する関西地方以西の諸社を中心にくりひろげられる1月10日の「十日えびす」の祭礼によって名高く、商売繁昌をねがう人々が神徳をもとめて洛中洛外より群集する風景は、福神信仰の興隆とともに都の名所、風物として18世紀末にはひろく定着していく。このように諸人の信仰と参詣によって殷賑をみせた近世の蛭子社であるが、度重なる類焼によりその実態についてはいまだ不明な点が多い⁸⁾。しかし近年関西大学永井規男教授を中心とした調査研究⁹⁾によって発見された建仁寺文書¹⁰⁾には、鎮守として同寺の支配下にあった江戸時代の蛭子社に関わる史料が元禄5年(1692)を初見として80点余り含まれる¹¹⁾。そして、これらの新出史料から明らかになる当時の普請計画には、当社が人々の信仰をあつめ、参詣の場として巷間に認知されていく状況をよみとることができる。本稿ではこうした史料をもとに、18世紀後半の蛭子社普請計画の変遷をたどることによって、参詣空間の成立に関わる氏子らの意識の発現を追及するとともに、そこに反映された近世蛭子社における社頭の維持運営の実態について論考する。

* 京都工芸繊維大学工芸科学研究科 博士後期課程

Graduate School, Dept. of Architecture and Design, Kyoto Institute of Technology

1 18世紀における蛭子社敷地形状の変遷

建仁寺境内の宅地開発や氏子らによる火除地の寄進などは、18世紀における蛭子社の社地面積に若干の増減をもたらした。当社の普請計画を追及するにあたり、まず敷地形状の変遷を概観しておく必要がある。元禄5年(1692)11月24日、蛭子社役人より奉行所へ提出された書付の控(史料1)、及び享保5年(1720)10月28日、当社の鎮座する建仁寺西門前下之町¹²年寄らの名をもって認められた同町に関する書付「覚」(史料2)には、17世紀末より18世紀初頭の蛭子社地に関する記述がみられる。

史料1(建仁寺文書4*001 元禄5年11月24日
「建仁寺西門前下之町 惠美酒之社屋敷之覚」)

一 東表口南北五間六尺
一 東西三拾六間三尺
一 西之地尻南北拾四間貳尺
右之通相違無御座候、以上
元禄五年
申十一月廿四日
御奉行様

吉田宇右衛門 ㊦
(他3名連署)

史料2(建仁寺文書28*031 享保5年10月28日「覚」)

(略) 当町西側南ノ辻より四拾四間半めニ
蛭子社 表口八間貳尺五分 別号無御座候
裏行卅六間半
右社地之内
南ノ方 借屋 表口貳間六尺五分
奥行拾三間
但両見世付宮守共会所ニ而、平常ハ借屋ニ仕置候
同地尻ニ敷有之 此坪数貳百拾坪
右蛭子社宮守ハ、建仁寺役人吉田宇右衛門・森武右衛門・森勘兵衛・大本八兵衛四人之もの往古より老年代り相勤申候(略)
右之通書付方内え遣シ申候、以上
享保五年十月廿八日
建仁寺御役者様 西御門前下之町 年寄平兵衛 ㊦

史料1によると、蛭子社は17世紀末の元禄期において「東表口南北五間六尺」「東西三拾六間三尺」「西之地尻南北拾四間貳尺」の地面を有していたことがわかる(図1-I期)。そして享保5年には史料2に示された「表口貳間六尺五分」の南隣敷地(図1-II期の①部分)が「宮守共会所」として社地の一部に加わる。当敷地が社地に包含されていく経緯については判然としませんが、宝永8年(1711=正徳元年)正月「建仁寺境内無検分西門前寛永廿年地図之写¹³」をみると、当敷地には「惣堂地藏寺 会所」とあり、かねてより会所がもうけられていたことがわかる。なお、この「東表口」の間数については他の史料との間に若干の食い違いがみられる。史料2が総間数を「表口八間貳尺五分」とするのに対し、後述する延享2年6月、宝暦3年5月、そして天明2年7月29日の絵図(図2)は、図1-I期に相当する社地表口を5間6尺2寸、そして図1-II期の①部分の間数を2間4尺1寸とし、総間数を8間3尺8寸とする。1間=6尺5寸としたこの合計値には整合性があり、本稿図1では、後者の間数を採用した。

さらに享保16年以降、建仁寺が蛭子社の西裏にひろがる敷地に幅2間の新道を縦貫させ、宅地として開発したことによって、西地尻の東西8間1尺8寸×南北14間2尺の部分(図1-III期の②部分)が削られ、社地は東表口8間3尺8寸、裏行28間1尺2寸となる(図1-III期)。そして寛政2年(1790)には、当社北西の小松町抱屋敷であった西表口5間1尺1寸、裏行16間半、東地尻3間5尺の敷地(図1-IV期の③部分)が氏子らによって買得され、火除地として蛭子社に寄付されることとなった(図1-IV期)。そのさい、この火除地に課せられる

年貢や歩役銀などについては、門前の4町¹⁴が氏子惣代として請け負うことが取り決められている¹⁵。

図1 蛭子社地形状の変遷

2 蛭子社と18世紀中期の普請計画

—延享2年(1745)及び宝暦3年(1753)の計画案を通して—

では、前章でみたような社地形状の変遷をもって、蛭子社の普請計画はどのようにすすめられていたのだろうか。史料2にあるように、当社には「宮守」がおかれ、建仁寺の役人である吉田宇右衛門・森武右衛門・森勘兵衛・大本八兵衛の4名が1年交代で勤めることになっていた。しかし宝暦4年12月21日「蛭子宮預り証文之事¹⁶」に「御当山(=建仁寺:筆者註)并境内惣鎮守蛭子社、銘々力者中間え為御扶助自古来御預け被為下置、難有奉存候、然上は不依何事当御役者様え御親申上、御許容之上万事執り行可申候」とあるように、建仁寺に属する彼らは社役人として当社の管理を任されていたにすぎず、その経営、普請などに関わる決定権はすべて建仁寺が掌握していた。従って、蛭子社地内における建物の修復や改築を遂行する際には、彼ら社役人の名をもって認められた計画の概要と簡略な絵図を記載した普請願書によって、公儀に先立ちまず建仁寺の了解が求められた。こうした経緯により、建仁寺には18世紀中期の延享2年より享和元年(1801)までの半世紀の間に提出された、未遂を含めて数度の蛭子社普請願が残される(表1)。後述するようにその普請計画は、明和7年(1770)案を画期として、参詣の場を意識したものへと変容するため、本章では一連の計画案のうち、宝暦3年案までを前半部としてとりあげる。なお、図2の社地内配置図7点(図2-①～図2-⑦)は、これら普請願などの史料に添付された絵図をもとに書きおこしたものである。その精度については文書によってひらきがあり、当絵図の性格として個々の建築物の社地内における配置を示すことに主眼がおかれているため、それぞれの計画案を検討するにあたっては、絵図から読みとることの

表 1 18 世紀後半における建仁寺門前蛭子社普請に関する略年表

年月日	出来事	図番号
延享2(1745). 6.	蛭子社大破による造作願。東表側鳥居の根礎屋根替、東表側玉垣・拝所・神楽所の建替、神輿蔵・御供所の移転建替、絵馬舎・裏借屋・裏出入口の普請等 → 未遂	図2-②
宝暦3(1753). 5.	延享2年普請願の改訂案。前回の普請案で提示していた絵馬舎・裏借屋造作を断念し、神輿蔵の建替は規模縮小、本社屋根を銅板によって覆い、檜皮葺替の工間を省略するなど計画の簡素化をはかるとともに、本社をそのまま西へ3間半、南へ1間移動させ、西裏口には玉垣・練堀・入口・鳥居を普請 → 宝暦6年7月以前に完成	図2-③
明和7(1770). 5.	本社の周囲を廻れるようにするという計画方針に沿って、社の改造及び社地内建物の普請を願い出る。御供所の移転建替、本社へ通う通路の付設、本社屋根銅板覆を取放ち、葺替はその都度氏子らが行うこととする → 奉行所の許可を得るが、実質は未遂か	図2-④
安永3(1774). 1.	前年より氏子らによって企画された当社における正月9日10日の参詣(十日えびす)開催について建仁寺より答めをうける	
天明2(1782). 7. 29	延享期に遡る「仮建」の当社や社地内の建物を往古の姿に戻すべく、普請を願い出る。本社・拝所・東表側鳥居の建替、末社3社の復活、神楽所及び御供所の移転建替 → 翌天明3年9月には大略完成	図2-⑤
寛政2(1790). 5.	社地北続地面を氏子中で買得し、火除地として蛭子社に寄進する	
寛政5(1793). 1.	天明2年の普請に関する追補的普請願。本社内陣廻造作の補足、絵馬舎普請、本社より鳥居までの間を敷石とする、末社稲荷大明神の移転建替など → 一部遂行	
寛政12(1800). 10. 28	未明(七ツ時分)蛭子社本社内より出火し、本社・神楽所・末社などを焼失する	図2-⑥
享和元(1801). 6.	焼失した本社以下の再建築提出。本社・拝所・末社の再建に加え、寛政2年に火除地として得た北続地面に神楽所・神輿蔵・宮守居宅などを移転再建、神楽所跡地に絵馬舎普請 → 再建の世話を任されていた氏子間で折り合いが付かず延引	図2-⑦

1 社	11 湯殿	21 末社	31 簀戸	41 カキ	51 上ヶ格子
2 拝所	12 板間	22 宮守居宅	32 中門	42 ねりへい	52 タン
3 神楽所	13 水鉢	23 御供所	33 揚弓射場	43 番所	53 拾帖
4 神輿蔵	14 押入	24 路次	34 土手	44 居間	54 六帖
5 雪隠・便所	15 高塚	25 絵馬舎	35 裏口	45 玄関	55 八帖
6 玉垣	16 井戸屋形	26 式台	36 板かこい	46 神供所	56 廊下
7 鳥居	17 茶店小屋	27 髪結床	37 ツリコ	47 飯小屋	57 腕木門
8 土間	18 縁	28 貸見世	38 台所	48 植込	58 土塀石垣
9 井	19 クド	29 物置	39 詰所	49 二畳	
10 空地	20 借屋	30 煮売茶屋	40 にわ	50 唐破風	

図 2 18 世紀後半における蛭子社普請計画の変遷

できる配置計画を中心として、普請願の計画方針に関わる文言とともに考察をすすめる。

2-1 延享2年(1745)以前の蛭子社(図2-①)

建仁寺文書において、近世蛭子社の普請に関わる初見記録は、延享2年の普請計画に際して作成された同年6月「造作仕度奉願候絵図口上書¹⁷⁾」である。同文書には、普請による改変前後の社地内の様子が絵図(図2-①・図2-②)及び文言をもって示されている。普請前の状況を図2-①によってみると、蛭子社は社地の東方に位置する建仁寺寺内に向かい東を正面とし、本社規模は桁行1間2尺5寸に梁行2間1尺3寸、背面をのぞく三方に幅2尺5寸の縁を廻し、正面に階をもつ。本社の前方には拝所が付設され、北側面と西背面は中門と板囲いによって閉ざされている。東表側には玉垣、鳥居をそなえ、敷地西南方には揚弓射場が設けられていたが、敷地の奥、西地尻は享保期に開発された町地との境が土手と裏口によって仕切られるのみで、いまだ整備されているとはいえない状況であった。

2-2 延享2年6月の普請計画(図2-②)

引き続き「造作仕度奉願候絵図口上書」によって、破損した建物の修復、建替を目的とした延享2年6月の普請計画に関する検討を行う。まず本社については、周囲に石垣を築き、板囲いをまわし、雨覆いを付加するといった程度の造作がなされているにすぎず、東表側玉垣は現状の姿を踏襲して再建、また東表側鳥居についても屋根替、根継ぎといった補修にとどめられている。しかし図2-②にみられるように、拝所をはじめ、神楽所、御供所、神輿土蔵など社地内における主要施設の大半は規模を拡大、移動させて再建し、敷地東南には絵馬舎を、敷地西南方の揚弓射場跡地には借屋、裏借屋を新造するなど、移転・規模拡張・新造による密集した配置計画が示されている。また、未整備の状態であった敷地の西地尻には、玉垣と1間3尺の両開き扉が新設されている。これは前章で概観したように、享保期の建仁寺境内の開発によって、社地西地尻の一面(図1-Ⅲ期の②部分)が削られ、そこに幅2間の道筋と宅地が形成されたことで、社地西方にも当社の氏子園となる町地が広がりをみせた結果による。

当計画は実現にむけて着々とすすめられ、延享2年12月19日には奉行所より普請の許容を得るにいたる。しかし実際に着工することではなく、計画案のまま終わることとなった。その原因は、史料4にみられるように、普請に必要な資金を調達できなかったことにある。当時蛭子社は建仁寺の鎮守として同寺力者らの手に預けられていたとはいえ、社の普請に関して本山建仁寺の名を表に出すことはかなわず、氏子らの合力にたのむ傾向にあったことが、当普請に際し社役人より建仁寺へ提出された「一札」(史料3)によって確認できる。

史料3(建仁寺文書12*007 延享2年6月「一札」)

蛭子社及大破申候ニ付、此度造作仕候、諸雑費之儀は信心之輩・氏子中勸化仕候儀故、御山中御名を出申候儀仕間敷旨被 仰渡、奉畏候、諸事相儀御名を出候儀は勿論、不実成勸化毛頭仕申間敷候 (略)

延享二年丑六月

両御役者様

森勘十郎 ㊤

(他社役人3名連署)

史料3にみられるように、建仁寺が寺名の威をもって勸化することを認めず、普請にかかる「諸雑費」は蛭子社独力の勸化によって調達すべしという態度をとる背景には、当時建仁寺ですでに伽藍の法堂再建計画が始動しており、蛭子社に対して寺名を冠した勸化を許容することが法堂再建資金獲得の妨げになると危惧した可能性が考えられる¹⁸⁾。また、史料3の文言をもって、建仁寺が鎮守として門前に

鎮座する蛭子社の修復に関して、何らの支援もみせなかったと判断するのは早急であるが、当時の慢性的な不況に加え、並行してすすめられていた半世紀にもわたる法堂再建に伴う寺内財政の逼迫化を考えると、社の修復支援に対して消極的な姿勢をとらざるを得なかったのではないかと推察される。

2-3 宝暦3年(1753)5月の普請計画(図2-③)

こうした修復費用の窮乏から、先に提示した普請計画は取り下げられ、全体的にコストを抑えた改定案が宝暦3年5月に提出されることとなった。史料4はその文案の一部である。

史料4(建仁寺文書4*055 宝暦3年5月「造作奉願候絵図口上書」)

(絵図略/図2-③参照)

一 建仁寺西門前下之町蛭子社造作之儀、去ル延享貳年丑十二月十九日、以絵図 東御役所え奉願候処、御赦免被成下難有奉存候、然所殊外大望之儀ニ御座候故、色々と仕候得共、出来兼難儀仕罷有候、依之惣体輕ク仕、何卒造作成就仕候様ニ仕度奉存候 (略)

宝暦三癸酉年五月

建仁寺西門前下之町

御奉行様

蛭子社当番 吉田左近

(以下略)

社頭の修復はこの改案された計画にそってすすめられた。先の延享案から変更された点を具体的にみると、①絵馬舎新造案を断念する ②神輿蔵は規模を縮小して再建する ③本社屋根を銅板によって覆う ④社地西南方の借屋普請案を断念する ⑤本社を西へ3間半、南へ1間移動させる ⑥西裏口に玉垣と鳥居を新設する、などの項目があげられる。このうち①～④についてはコスト削減のため前案から変更を余儀なくされたものと考えられるが、それとともに神楽所や社当番の居宅は本社北側にまとめて配置され、本社の北側と西背面はそれぞれ附属建物と高塀によって閉ざされることとなった。

以上、延享及び宝暦の計画案について、本社と附属建物の関係を中心にその計画方針を考察すると、宝暦案では普請費用を軽減するために延享案とはかなり異なった計画をとってはいるものの、両案には本社と附属建物を隣接させ、まとまった建築群として配置させようとする共通した姿勢をみてとることができる。そして普請費用を調達することができず未遂に終わった延享2年の計画に対し、費用の軽減をはかったこの宝暦3年の普請計画は実現にこぎつける。しかし宝暦6年7月、社地内の空地貸付をめぐって社役人より建仁寺に提出された「乍恐奉願上候口上書¹⁹⁾」には「(普請に関わる)諸雑費多御座候故、他借ニ相成、息物難弁、段々難渋之仕合ニ罷在候」とあり、この段階でいまだ他所から借財した修復資金の返済に困窮していることが確認できる。同文書には続けて「御社西南の方ニ空地御座候ヲ、壹ヶ年限ニ樹木植込場ニ貸付置、少々宛之地代ニ而借物之利息も弁来候処、去冬地面返却仕候、依之右之場所ニ而三十日限辻能興行之儀取組申度相願候者御座候ニ付、貸附申候而、他借之息物等も相弁申度奉存罷在候」とあり、社地西南方の揚弓射場跡地を辻能興行者や煮売商売をのぞむ者に貸し付け、徴収した地代を借金の返済にあてようと計画していたことがわかる。

このように、社地の一部を他者に貸与することで社頭維持の助力としていた蛭子社の姿は、18世紀後半を通して確認することができる²⁰⁾。しかし、建仁寺の鎮守として境内の一面にわずかな社地を得て存在した蛭子社にとって、狭小な敷地の一部を貸し付けることが、どれほどの収入になったのかは疑問である²¹⁾。そのうえ上述したように、当時社の修復に関して寺内の強力な支援があったとも考えられず、蛭子社にとって、社頭を維持するためにはさらに別の手段を講じる必要があ

ったのではない。そしてこの段階にいたり、参詣者の集客とそれに伴う賽銭収入の重要性が氏子らに認識されていく。安永2年(1773)、参詣者獲得の目玉として「十日えびす」の祭礼が氏子中より企画され、当社の新たな資金調達策が始動することとなった。

3 「参詣の場」としての蛭子社

ここで建仁寺門前蛭子社における諸人の信仰と参詣の有様について簡単に言及しておこう。建仁2年(1202)の建仁寺創建にまで遡るという蛭子社の成立に関わる史実は判然としなない²²ものの、『祇園社家記録』には観応元年(1350)9月9日「建仁寺鎮守祭の風流、之を見物す²³」とあり、建仁寺鎮守蛭子社の中世における祭礼の存在を示す。

江戸時代に入ると、享保2年(1717)成立の『京都御役所向大概覚書²⁴』が「建仁寺門前恵比須宮 神輿老基 九月廿日 神事(略) 氏子境 北ハ建仁寺町通四条限 南西ハ五条通町裏限 西ハ宮川筋裏限 東ハ六波羅野限」とするように、蛭子社は建仁寺境内一円を氏子圏とし、毎年9月20日に例祭を催している²⁵。そして、この例祭がすでに17世紀には氏子中にとどまらず京中の商人の信仰を集めていたことは「(9月20日の祭に)京内のあき人まふでいふ」という延宝6年(1678)刊『京雀跡追²⁶』の記事にうかがうことができる。

しかし寛政11年(1799)刊『都林泉名所図会²⁷』が当社の景を描くにあたり、9月の例祭日ではなく、正月の「十日えびす」の盛況ぶりを採択したことや(図3)、元治元年(1864)刊『花洛名勝図会²⁸』が例祭や10月の夷講の有様について「詣人群をなしつれど」としながらも、「取はけ十日蛭子は初春の一絞日にして河東の賑ひいふばかりなく、遊客騷士の遊参初めともいふべきか」と特筆することからもわかるように、江戸時代、新規の祭礼として開始された「十日えびす」の賑わいは、18世紀後半以降9月の例祭を凌駕し、当社を代表する風物詩となっていく。そしてこのような殷賑をみせた当社における「十日えびす」の成立背景は、安永3年(1774)正月付建仁寺文書「奉願口上書」によって明らかになる(史料5)。

史料5(建仁寺文書 12*123 安永3年正月「奉願口上書」)

一 去年当年正月九日・十日蛭子宮参詣之事新規之儀ニ付、前以御親申上、御許容之上相企可申也、心得違ニ而其儀無御座、此度蒙御答恐入奉存候、此儀は元来私共存付、相願申候儀ニ而は曾而無御座、大和町・亀井町両町中より去年と風思ひ付、相企申候事ニ御座候、尤不有来事故差而参詣人も有間敷、神日同前之事ニ而逐年弘り可申哉と存居申候ニ付、御親可申上心付も無御座候也、所柄之者共相加り、かさ高二取斗ひ騒敷相成案外之儀、右御答之段御断可申上様も無御座、不調法至極奉誤候(略) 右両町之者共存付候趣意ハ、右両日散物之内を両町え預り置、先達而御願申上置候社修葺之儀、時節柄所詮寄進物ハ出来不仕候故、右之散物を元立ニいたし、修理可仕趣向ニ而(略)

同文書は、前年(=安永2年)より氏子の町々が企画した「正月九日・十日」の「参詣之事」を催すにあたり、建仁寺へ前もって届け出ず執行したところ、新規の祭礼にもかかわらず「かさ高二取斗ひ騒敷相成」った結果、咎めをうけたことに対する社役人らの返答である。これによって当社の「十日えびす」が安永2年に氏子らの企画によって開始されたこと、そして開催の趣旨が参詣者の「散物」によって当社の修復金を確保するところにあったことがわかる。

この「十日えびす」では兵庫県の西宮神社や大阪府の今宮戎神社における祭礼が名高いが、両社における当祭礼の成立は、安永期に始まる建仁寺門前蛭子社のそれをはるかに遡る。両社において17世紀以前よりすでに成立していた「十日えびす」の祭礼と、建仁寺門前蛭子社における当祭礼の関わりを明確に記す文書はみあたらないが、

江戸時代における西宮神社の「十日えびす」では、元禄17年(1704)には7貫600文、享保20年には24貫文、天明5年(1785)には118貫600文、そして寛政3年には133貫の賽銭を得ていたことが指摘されており²⁹、当時近隣の社において高まる一方であった「十日えびす」の殷賑ぶりが、安永期にいたり当祭礼を建仁寺門前蛭子社において企画した氏子らの胸中にあった可能性は考えられる。

また史料5には彼らが「十日えびす」を「不有来事故、差而参詣人も有間敷、神日同前之事ニ而逐年弘り可申哉」と想定していたことが記される。これらは建仁寺の許可を得ず祭礼を執行したことに対する弁解であり、文言どおり彼らがこの祭礼を漸次的な参詣者の動員をもたらすものとしてとらえていたと断定することは難しいが、少なくとも当時蛭子社の例祭がさほどの集客を得ていなかったことは事実であろう。そうした状況下で新規の祭礼を催し、賽銭収入につながる参詣者の増大を図るためには、祭礼の「場」となる社地内の配置計画もそれに適応させる必要があったと考えられる。宝暦期までの「本社を附属建物と隣接させ、まとまった建築群として配置する」計画方針は、ここにいたり変更を余儀なくされ、次章でみる明和7年(1770)以降の普請案には、本社の独立性を際立たせた計画が採択されていく。

図3 十日えびすの風景(寛政11年刊『都林泉名所図会』より)

4 明和7年(1770)5月以降の普請計画 一参詣空間の成立一

4-1 明和7年(1770)5月の普請計画(図2-④)

明和7年5月、蛭子社役人らによって新たな普請願が提出される³⁰。そこには「(当普請願は)時節柄不相応之儀ニ思召之程も奉恐候得共、氏子中存知寄ニ而、免角社相廻り候事相成候様ニ普請仕直シ呉候様相願候ニ付、不得止事を御願申上候」とあり、この普請計画が、破損による修復などを主目的としたものではなく、本社を高塀や附属建物から切り離して独立させ、周囲を参詣者が廻れるようにしてほしいという氏子らの要望をうけた、社役人らにとっては「不得止事」とであるという興味深い一文が認められる。前述したように、延享期及び宝暦期の蛭子社絵図(図2-①～図2-③)をみると、本社の周囲は高塀や附属建物によって一部さえぎられ、参詣者が周囲を一巡して参拝することはできない。また図2-③及び図2-④によってこの明和7年案の計画方針を考察すると、本社と接した詰所や台所部分の移動を除くと大きな変更はみられず、当計画は本社の独立配置を求める氏子らの要望をそのまま反映させたものであったといえよう。

そして、この「附属建物から切り離し、独立させた本社の周囲を一巡できる」計画方針こそが、これより3年後の安永2年に参詣者の「散物を元立ニいたし、修理可仕趣向」を背景として成立した「十日えび

す」における群集を想定したものであったのではないかと考えられる。本社を独立させてその周囲にスペースをとることで、祭礼の一両日に福を求めて群参する参詣者をより多く社地内に引き込み、雑踏の混乱を緩和させようとしたのではないだろうか。

この明和の普請は奉行所の許可を得ながらも未遂に終わる³¹が、後年天明2年(1782)の普請計画においても、本社を独立させ、周囲を廻ることができるようにした案が採択されることとなった。

4-2 天明2年7月29日の普請計画(図2-⑤)

天明2年の普請計画は、同年7月29日蛭子社役人より奉行所に提出された文書の控と考えられる「普請之御願」(史料6)によって明らかになる。同文書には「蛭子社地面ニ社・其外建物等有来候处、不勝手ニ付、此度普請仕度奉願候覚」とあり、この普請が配置計画の改良や破損修復を目的としたものであったことがわかる。

史料6(建仁寺文書 12*037 天明2年7月29日「普請之御願」)
(絵図略/図2-⑤参照)

- 一 蛭子社往古は檜皮葺ニ而、唐破風等有之候处、先年類焼仕候ニ付、焼残候唐破風は取除置、有来之通檜皮葺之仮建仕置候处、及破損修復難相成、仮葺ニ而取繕置候处、此度右仮小屋取崩、往古之通式間ニ式間半之本社檜皮葺仕、老間四方之拝所ニ取除置候唐破風破候所々取繕上ケ、且又本社西北折廻庇付申度、朱引之通奉願候(略)
- 一 本社東之方三尺四方之末社三ヶ所有来候处、焼失後得相建不申、此度如元相建(略)

史料6は「普請之御願」より主要建物となる本社・拝所・末社に関わる普請内容を抜粋したものである。「仮小屋取崩」「往古之通」「如元相建」といった語からもわかるように、そこには当社の主要建物が「先年類焼」する以前の姿に復古することをのぞむ姿勢がうかがえる。建仁寺文書のなかには、天明2年以前に当社が類焼の被害に遭ったことを記す史料はなく、史料6のいう「類焼」の時期を特定することは難しい。しかし延享2年(1745)より確認できる一連の当社配置図のなかに、罹災前まで存在したという末社を描くものがみあたらないことから、当社の類焼はそれ以前に遡り、本社は「仮建」のまま40年以上の歳月を経るなかで、費用の窮乏から簡素な補修にとどめられてきたと考えられる³²。この天明2年の普請願によって、「仮建」の社は2間×2間半の檜皮葺本社に拝所をそなえた「往古之通」に再建され、焼失以来建てられることのなかった末社3社も復活する。翌3年9月には普請の大部分が完了し、遷宮も行われることとなった³³。

4-3 寛政5年(1793)正月の普請計画

寛政期に入ると、さらなる社頭の整備を求める氏子らは、計画に差支えありとの理由で建仁寺より一旦却下されたにもかかわらず、寛政5年正月「乍恐奉願候口上書」によって蛭子社普請に対する趣旨理解を求め、計画を断行することに消極的な姿勢をみせる社役人を介することなく、建仁寺に直訴している³⁴(史料7)。

史料7(建仁寺文書 12*043 寛政5年正月「乍恐奉願候口上書」)

- 一 産神 蛭子御社之儀は、私共一統信仰仕、兼而世話方ニ罷在候处、先年御本社御造営大抵心願成就仕候姿ニ御座候得共、大普請之儀故、未行届不取メリ之儀も有之、歎々敷奉存候、依之世話方申合、此度御社普請手メリ金備仕候模様ニ相定、氏子町々えも及来談ニ候处、何れも同意之儀ニ御座候故、御社役人中え右之趣申入、御別心無之候ハ、早々御願被下候様申入候ニ付、旧冬御社役人中より龜絵図を以御伺被申上候所、御差支御座候由ニ而絵面御下ケ被遊候旨承知仕、奉恐入候(略)何卒今一応御願申上被呉候様、御社役人中え精々申入候得共、一端絵面御下ケ被遊候御事故、此上強而願上候儀は不相成趣被申聞、無廻相聞候得共(略)一統存立侯始終念願之趣意、具ニ役人中より不申上儀と推察仕候ニ付、不願恐連判之者氏子為惣代、又々御伺奉申上候(略)

寛政五年丑正月

氏子中世話方惣代

下柳町 亀屋徳兵衛 ㊤

御地頭様

(他5名連署)

「乍恐奉願候口上書」に提示された具体的な普請内容をみると、内陣廻造作の補足をはじめとして、絵馬舎の再建、末社の規模を拡張して移転再建する、東表側鳥居より本社までの間を敷石とするといったことが要求されている。こうした社頭の整備とともに、火災によって大破した神輿蔵の移転修復、火災後竹垣となっていた西裏地境への土塀普請、本社裏手に非常用の手洗場所井戸を設置、などの防災に配慮した項目があげられている。これは京都の大部分が類焼するにいたった天明8年の大火によって、火元に近接していた³⁵当社も社地西方の一部に害を被ったゆえの対策であろう。

ところでこの普請願が「御差支御座候」と、建仁寺より一旦棄却されたものであったことは先に述べた。同文書には、その原因に深く関わっているであろう興味深い計画が認められる。それは、上に掲げた末社稲荷大明神の移転先を当社北方の火除地に求め、「是迄御場所甚行詰有之故、持添地手広キ所、絵面之通北西之隅え東向ニ引移」すとしていることである(図2-⑥)。本来空閑地とすべきところ³⁶に規模を拡張した末社を移転させるという計画には、末社を賽銭収入に直結する施設ととらえ、建築規模の拡大とともに十分なスペースを提供することで、収益の増大をはかろうとする姿勢がうかがえるのではないだろうか。さらに推測するならば、1章でみたように、そもそもこの火除地は、寛政2年に氏子らが寄進したものであった。それからわずか3年後に、寄進した当人らによってこうした要望が提出されるといふ流れからは、火除地の寄進自体が末社移転を念頭においた行為であったことも考えられよう。

4-4 寛政12年の類焼と再建計画(図2-⑥・図2-⑦)

こうして次第に整えられていく蛭子社の景観は、老若男女が群集する十日えびすの祭礼日を描いた寛政11年刊『都林泉名所図会』の画面(図3)にうかがうことができる。しかし寛政12年10月28日、蛭子社は本社をはじめとして末社、神楽所、及び近隣の借屋などを類焼することになる。図2-⑥はその出火時の建物配置を描いた「出火絵図³⁷」などをもとに書きおこしたものであるが、ここに記されるように、原因は本社内からの出火によるものであった。類焼の顛末を記した寛政12年10月28日付建仁寺文書「差上申一札³⁸」によると、同日未明、往来の出火騒ぎに「相驚早速起出」した宮守の吉田頭之丞が目にしたものは「社内より出火之様子」の炎上する蛭子社の姿であった。「御火消方」が出て早速鎮火につとめるが、「最早本社一円焼失仕、同所北之方ニ有之候末社稲荷社え飛火仕」状態であったという。

突然の罹災による蛭子社の再建をめぐる噴出する氏子らの要望には、当社へむかう参詣者に対する意識が明確にあらわれることとなった。それらを考察する前に、まずこの類焼をうけて建仁寺及び社役人らが復興支援としてとった対応について述べておく必要がある。

史料8(『建仁寺参暇日記』寛政12年11月条「口上覚」)

- 一 此度鎮守蛭子社致焼失候ニ付、差当り仮殿ニ而も取繕、神体安置無之候而不相済候事故、不取敢地頭より銀老貫五百目、境内え相渡候、右之銀子を以致世話、可也之仮殿取繕、神体安置相成候様頼入候(略)追而本殿再造世話有之度候、其節再造之儀ニ付、境内趣意之所も有之候ハ、役人迄可申出候(略)是れ也 開山大年忌最早近年ニ相成候得は、諸堂修覆并法会等、過分之雑費有之事故、本社再造入用之处、十分之事は難及義ニ候得共、又々其節相談之致方も有之事と被存候(略)

史料9(建仁寺文書 12*056 辛酉=寛政13年正月「奉伺口上覚」)

- 一 御社焼失仕候ニ付、常住表より御銀御境内中え被為成御渡、於私共も難有奉存候、右ニ准シ、御社役人共より出銀可仕敷ニ御座候得共、困窮之者共ニ

御座候得は、聊之儀も難仕候、就夫当春元朔より日々散物・御膳料共、不残氏子中へ相渡、此收納を以御社始再建皆出来迄世話取斗相頼申度奉存候（略）

『建仁寺参暇日記³⁹』には、蛭子社焼失後の寛政 12 年 11 月、建仁寺が氏子らの惣代である門前の頭町年寄らによせた再建支援に関する口上が控えられる（史料 8）。また史料 9 は翌 13 年正月、蛭子社役人 4 名の連署をもって建仁寺に提出された書付であり、再建に関する社役人らの支援策が示されている。これらの史料によって当社再建にあたっての建仁寺及び社役人の対応をみると、まず建仁寺は文化 11 年(1814)の開山 600 年忌を控え⁴⁰、寺内においても諸雑費の入用な時節柄、十分な支援はできないとしながらも、「差当り仮殿ニ而も取締」必要性があらうと、銀子 1 貫 500 目を境内へ下げ渡し、「境内趣意之所も有之候ハ、役人迄可申出候」と、氏子らの要望を聞きとどけようという姿勢をみせている⁴¹。一方、社役人らは「困窮之者共」ゆえ⁴²自分たちが銀子を供出することは「聊之儀も難仕」とし、代案として寛政 13 年正月朔日より日々の「散物・御膳料」を残らず氏子中へ渡すことを提案している。しかし、こうした支援をみせながらも、間近にせまった開山大年忌や慢性的な「困窮」といった問題を抱える寺内及び社役人の示す蛭子社再建への対応は必ずしも積極的なものとはいえない。畢竟、再建に関わる世話は氏子らに委ねられていく。

史料 10(『建仁寺参暇日記』寛政 13 年 1 月 26 日条)

(略) 社役四人え申渡

- 一 蛭子社不存寄火災ニ及、歎敷事ニ候、一ヶ年ニ而も早く致再造度候へ共、皆々存候通、大年忌も不違、諸普請其外之物入不軽事故、不任衆心候、依而此度衆評之上、境内氏子中へ再建之世話相頼候（略）右ニ付而ハ、宮番年々交代神前毎日の取行并神前之掃地、且又公儀願事有之節、祭礼式等之事ハ是迄致来之通、無怠可相頼候、其余之事并社納物之儀は、一切氏子中へ打任せ、何とそ早く再造相調候様其方共よりハ別而実儀ニ厚く相頼可申候（略）

史料 11(『建仁寺参暇日記』寛政 13 年 1 月 26 日条)

(略) 境内新・古年寄・五人組へ申渡手扣（略）

- 一 社頭焼失ニ付、当分仮殿ニ而も取立可然哉ニ去冬申達候処、氏子中相談之上、仮殿ニ不及直ニ奉社再建ニ取懸り可然由ニ而（略）仮殿為取締銀子壹貫五百目相渡可申段、去冬申達候処、仮殿ニ不及由ニ付、右銀子も其俟預り置候、右之銀子へ此度四貫五百目相添、都合六貫匁氏子中へ相渡可申候間、再建之奉立ニも相成かしと存ル事ニ候（略）

史料 10 及び史料 11 は、再建をめぐり建仁寺が蛭子社役人及び境内氏子中へ達した内容の控である。ここから明らかなように、従来社役人の得ていた「社納物」などは再建の助力⁴³として今後氏子らの手にわたることが定められた。それに加えて、「仮殿ニ不及直ニ奉社再建ニ取懸り可然由」という氏子らの要望にこたえ、史料 8 で提示された 1 貫 500 目の銀子に 4 貫 500 目を加算した計 6 貫目の銀子を再建資金として寺内より合力することがいわれている。こうした支援をうけて氏子主導のもと始動したその再建案は、享和元年(1801)6 月付建仁寺文書「普請御願⁴⁴」にみることができる(図 2-⑦)。そこには「本社間数如元取建、沓間半四方之前拜付、有来之通屋根檜皮葺ニ仕、前拜ニ唐破風・獅々ロフ上ケ、階・高欄等付、且又両妻ニ狐格子付」とあり、細部意匠については確証を得ないものの、本社の規模は焼失前の姿を踏襲しているようである。また、宮守居宅が本社と近接した社地北方の「火除地」に配置されていることについての理由も定かではないが、先年の類焼の反省をふまえ、社の大変にいち早く対応するための措置であるとも考えられる。しかしこの再建案については、氏子内で折り合いがつかず延引し、膠着した状態をみかねた建仁寺によって計画はひきとられることになった⁴⁵。

史料 12(建仁寺文書 50*021 享和 3 年 9 月 24 日「乍恐御伺申上候口上書」)

一 御鎮守蛭子御社御再建之儀、先達而新・古門前え被 仰付候処（略）古門前より色々心配仕懸ケ合候得共、兎角延引ニ相成候故、御地頭様え御引取御修造可被遊旨ニ被 仰聞奉承知候、然ル処、御仮殿之儀、早々再造ニ取掛可申存念ニ而、聊之御仮殿取締候儀ニ御座候得は、僥忽ニ存、人々之崇敬も薄相成候而は、無勿体義ニ奉存（略）僥抹之御仮殿ニ御座候得は、年々諸人之恐敬も軽勿ニ相成目、参詣人も少ク、氏神之御威徳も日々ニ隣申（略）且氏子之者共も氏神之祈運も無之歟と他所之聞も如何と甚に不快奉存候（略）

そして享和 3 年 9 月 24 日、史料 12 にみられるような文言をもって、氏子である建仁寺古門前 4 町の年寄らは蛭子社再建計画に関する彼らの要望を建仁寺に訴える。その趣旨は、いかに参詣者を当社に集客するかという点にあった。史料 11 のなかで「当分仮殿ニ而も取立可然哉」とする建仁寺の意見に対し、「仮殿ニ不及、直ニ奉社再建ニ取懸り可然由」とこたえていた彼らは、計画が建仁寺の手に移って以降もなお、再建される本社が「早々再造ニ取掛可申存念」の結果「僥抹之御仮殿」となつては、「氏神之御威徳も日々ニ隣⁴⁶」いで当社への参詣者が減少すると危惧し、さらには「他所之聞」も芳しくないと、あくまで荘厳な姿に拘泥する。そこには威容を誇る外観こそが社の威徳を生み、人々の信仰心を育むという氏子らの意識が認められよう。

おわりに

建仁寺門前蛭子社における 18 世紀後半の普請計画の変遷をたどることによって、当初はその修復費用を氏子らへの勸化や他所からの借金、あるいは社地内のわずかな空地を貸し付けて得た地代などに求めていたことが確認できた。しかし社頭維持に必要な諸雑費の調達に関して、建仁寺の名を冠した勸化を得ることはかなわず、また狭小な社地においては大規模な借地経営なども成立せず、当社では資金調達の難航から計画案の簡素化や普請の延引がはかられる傾向にあった。こうした脆弱な経営基盤の下で、参詣者のもたらす「散物」が社の修復維持に関わる収入源として重要視されていくが、当時福神信仰の定着とともに、商売繁昌の利益をもとめる諸人の信仰を集め、すでにその素地が形成されていた蛭子社にとって、この動向は当然の帰結であったともいえる。18 世紀後半にいたり、それらが現実的手段としてとらえられ、諸人が社に群参することをみこした配置計画として本社を周囲から独立させるという方針がとられ、新規の祭「十日えびす」の開始とともに、積極的な社頭の整備が氏子らの手によってすすめられていく。寛政 12 年の罹災による本社焼失後の再建にいたっては、開山大年忌を控えた建仁寺や困窮する社役人らによって再建計画が氏子らの手に委ねられたうえで、当社における日々の「散物・御膳料」をもって再建資金にあてることが定められたが、そのことは彼らに「散物」収入の重要性、ひいては参詣者集客の必要性をより強く認識させたと考えられる。そして本社の再建には、「聊之御仮殿」による迅速な復旧ではなく、堂々たる外観をもつ姿こそがのぞまれていく。そこには、人々をひきつけるこうした要素を充実させ、参詣空間の演出をはかることが集客につながり、社頭維持に不可欠な「散物」の収入を保証するという意識の発現をみてとることができるだろう。

本稿は 2000 年度(財)住宅総合研究財団研究助成による成果の一部である。

⁴¹ 拙稿：明和 2 年における建仁寺法堂再建と境内の開発について、日本建築学会計画系論文集、第 543 号、平成 13 年 5 月

⁴² 拙稿：近世京都における新地開発について - 18 世紀建仁寺門前地区を事例として -、日本建築学会計画系論文集、第 532 号、平成 12 年 6 月

⁴³ 近世寺院境内の実態に関する諸研究のなかでも、境内に殷賑をもたらした遊興空間をとりあげ、江戸護国寺境内に建設された「護国寺境内札所三十三観音」

を事例として、その建設発願より運営の実態にいたるまでを明らかにした光井渉氏の論文「近世寺院境内における遊興の演出－「護国寺境内西国札所写」の経営と構造－」（建築史の鉱脈、中央公論美術出版、平成7年5月）などは、近世社寺境内に創出された遊興地を、寺社内部の経営活動の一環として論考を加えた先行研究として興味深い。

⁴伊藤毅氏は「中世都市と寺院」（高橋康夫・吉田伸之編：日本都市史入門Ⅰ 空間、東京大学出版会、平成元年11月）において、中世京都の寺院「境内」の空間構成とその特質を明らかにしたうえで、京都山麓に位置する有力寺院ではこうした空間が近世にも継承されていくことを指摘する（都市史研究会編：年報都市史研究1 城下町・原景、山川出版社、平成5年9月）。

⁵永井規男氏は「建仁寺寺地全図と近世建仁寺の景観」（平成9年度日本建築学会近畿支部研究報告集、平成9年7月）のなかで、塔頭に囲まれた閉鎖的な寺地とその周辺に広がる町地とともに、河川や敷地によって構成される江戸時代の建仁寺境内の景観を紹介する。

⁶元治元年(1864)刊『花洛名勝図会』（竹村俊則編：日本名所風俗図会7 京都の巻1、角川書店、昭和54年9月）は姪子社について「始めは同寺（＝建仁寺：筆者註）門内に在しを、中古この地に遷す」と、当初建仁寺内に存在したものを後世に現在地へ移転させたとする。

⁷当社の社号は明治14年5月27日の「社号文字換之義ニ付伺」（内務省指令編製、京都府立総合資料館蔵）によって「恵美須神社」となるが、本稿では近世当時の社号「姪子社」に表記を統一する。

⁸『神社明細帳』（京都府立総合資料館蔵、明治17年）は当社の由緒について「度々延焼ニ付焼失不分明」とする。

⁹平成8年度～平成10年度科学研究費補助金(基盤B)を得て実施された。その成果は『近世東山の景観構成諸要素に関する文献的研究』（平成11年4月）にまとめられている。

¹⁰建仁寺蔵。なお同史料は前掲註9の研究調査によって、マイクロフィルムに撮影されている。

¹¹拙稿：18世紀後半の建仁寺門前姪子社について、日本建築学会大会学術講演梗概集(関東)、平成13年9月

¹²現小松町

¹³建仁寺蔵。「建仁寺境内無検分西門前寛永廿年地図之写 寛文(永か)廿年以後之建家分、所々張紙仕候」とあり、建仁寺西門前を描く寛永20年(1643)の絵図(写)を骨格として、以降の建家が貼紙によって示されている。

¹⁴現大町・亀井町・博多町・小松町

¹⁵寛政2年(1790)5月付建仁寺文書50*029「奉指上一札之事」に「此度鎮守姪子御社為火除、御境内小松町抱屋敷々所（略）氏子中より買得仕、御社え持添地ニ永々奉寄附候処実正ニ御座候、然ル上は 御地頭様御年貢・歩役銀・掃地米并小松町諸入用ニ至迄、氏子中惣代御門前四町引請取集、無相違相納可申候」とある。

¹⁶建仁寺文書12*009。社役人大本勝藏他2名の連署をもって建仁寺へ提出した姪子社預りに関する証文。

¹⁷建仁寺文書4*040。同文書は姪子社当番が奉行所へ普請の申請を行うに先立ち、その文案を建仁寺役者へ提示して承諾を得る際に作成されたものと考えられる。

¹⁸明和2年(1765)に上棟された建仁寺法堂再建に関わる史料は享保12年(1727)より確認することができ、再建計画は発願当初より半世紀にわたる長期的大事業としてとらえられ、上棟をむかえて以降も資金調達に苦慮し、末派寺院への勸化や門前諸町の合力要請が明和～天明期までたびたび行われている。詳しくは前掲註1論文を参照されたい。

¹⁹建仁寺文書12*010

²⁰大坂では明和・安永期(1764-81)から天保期(1830-44)にかけて寺社の行う富突興行が盛んとなったことが指摘される(新修大阪市史編纂委員会編：新修大阪市史、第3巻、平成元年3月)が、姪子社においても天明期から寛政期にかけて、御室御所、愛宕大寺院、梶井宮、西山善養寺などを興行主とした富突の場として社地の一部が貸し付けられている(建仁寺文書12*062、同12*068、同12*070、同12*074、同51*053)。そして御室御所による富突興行に際し、社役人らは天明3年(1783)9月付建仁寺文書12*062「奉伺口上書」によって「(富突場として社地の一部を貸与することで得た)収(収)納物ニ而借銀成崩申度奉存候」と建仁寺に願い出ている。また寛政5年(1793)正月には、社地内の空地において「借屋相建申度趣意は(略)後々相続も仕候ハ>、御社向諸般御助成ニも可相成哉」（建仁寺文書12*043「乍恐奉願候口上書」：史料7後文）と社経営の一助として借屋を普請することが計画されている(図2-⑥参照)。

²¹光井渉氏が「近世中期以降における都市内寺院境内の変容-江戸浅草寺寺院境内の土地経営-」（都市史研究会編：年報都市史研究4 市と場、山川出版社、平成8年10月）のなかで、浅草寺寺院智光院における延享2年の収入のうち56.7%を境内地借家が占めていたことを指摘するように、広大な境内を有する近世寺院では収入の大部分を境内の借地経営によっていたことがわかる。

²²当社が建仁寺の鎮守として勧請され、その成立が建仁寺創建に遡るという説が江戸時代の巷間及び寺内において定着していたことは、姪子社役人として任ぜられた建仁寺力者4名の連署をもって奉行所に提出された姪子社建立に關わる誓付の控(元禄5年6月15日付建仁寺文書4*008「覚」)に「建仁寺境内 恵美酒宮 四百九拾一年已前建仁貳壬戌年、金吾將軍源頼家御造宮、建仁寺鎮守也」と所載されることなどからうかがうことができる。

²³当該部分は『史料京都の歴史 第10巻 東山区』（平凡社、昭和62年3月）に所収される。

²⁴岩生成一監修：京都御役所向大概覚書一下巻一、清文堂史料叢書第6刊、昭和

48年8月

²⁵寛延4年(1751)8月19日付建仁寺文書12*008「乍恐御願申上候口上書」のなかで社役人らが「姪子社神事、例年九月十九日・廿日ニ而御座候処、從今年九月十五日・十六日ニ執行仕度奉願候」と奉行所及び建仁寺にうかがいをたてているように、例祭の日時は18世紀中期以降9月15、16日に改められたと考えられる。

²⁶野間光辰編：新修京都叢書、第1巻、臨川書店、昭和42年10月

²⁷野間光辰編：新修京都叢書、第9巻、臨川書店、昭和43年1月

²⁸前掲註6

²⁹魚澄惣五郎編：西宮市史、第2巻、西宮市役所、昭和35年3月

³⁰建仁寺文書12*027「乍恐奉願絵図口上書」

³¹姪子社宮守より奉行所にあてた安永7年(1778)12月付建仁寺文書12*036「奉願候造作出来不仕候覚」には「建仁寺門前姪子社及破損申候ニ付、造作仕度義明和七年寅五月 東 御役所え奉願御赦免被 成下候得共、普請未出来不仕候」とあり、当計画が明和7年(1770)5月に奉行所の許容を得ながらも、安永7年にいまだ完遂していなかったことを証す。そして後年天明期の普請願書において提示される有來の図は宝暦期の配置をとっており、明和期の計画案が採択されないまま天明期の普請を迎えたことがわかるが、当計画が実現しなかったことについてその事由を明確に示す文書はない。

³²例えば史料6には本社檜皮葺屋根の破損に対し「修復難相成」ことから「仮葺ニ而取繕置」という措置をとったことが記されているが、これはおそらく本社屋根を銅板によって覆い、葺替の工費、手間を忌避した宝暦3年(1753)の計画を示しているのであろう。

³³天明3年(1783)9月付建仁寺文書12*062「奉伺口上書」（前掲註20史料）には「此度御社就大破、普請相催候処、氏子并世話方より相進（略）荒方普請出来仕、依之乍不都合遷 宮相勸申候」とある。

³⁴建仁寺より普請願の棄却をうけ、一度は氏子らの懇望をしりぞける姿勢をみせた社役人であるが、史料7にみられるような姪子社の社頭整備に関わる氏子らの積極的な姿勢におされ、寛政5年(1793)正月付建仁寺文書12*045「口上覚」において、「(以前の普請願却下の命に対し)則其趣氏子世話方之者へ為申聞候処、全体此儀は私共元來心得違不行屈筋も有之、且又 御社ニ付世話方之者深き願意も御座候故（略）今一応御願申上呉候様、強而申募候（略）何共恐多奉存候得共、推而奉伺候間、何分ニも今一度御差図之程奉仰候」と、建仁寺に対し一旦却下された普請願の再検討を社役人自ら願っている。

³⁵天明大火は鴨川の東、宮川町団栗図子を火元とした。折からの強風によって火は宮川筋を南にはしり、鴨川をこえて西方に広がり洛中一帯を類焼する(京都の歴史6、学芸書林、昭和48年3月31日)が、火元南東に近接する姪子社は、社地西裏を通る宮川筋類焼の影響をうけ、敷地西方の宮川筋寄りに位置した土蔵などに被害をうけたと考えられる。

³⁶火除地に末社を移転させることについて氏子らは「尤持添地之儀は、火除場所之事故、右場所へ引移候儀、如何ニ可被思召哉ニ奉存候得共、御本社えは余程間数も御座候ニ付、非常妨ニも相成不申」(寛政5年正月付建仁寺文書12*043「乍恐奉願候口上書」)と、類焼などの心配のないことを主張している。

³⁷建仁寺文書12*057、同12*058

³⁸建仁寺文書12*046。当時姪子社の宮守を勤めていた吉田頼之丞以下、類焼した小松町の借屋人らによって奉行所へ報告された文書の控である。そこには出火原因が神前に灯した「焼明」であったとの見解が示されている。

³⁹建仁寺蔵。なお同史料は前掲註9の研究調査によって、マイクロフィルムに撮影されている。

⁴⁰『建仁寺参暇日記』文化10年(1813)2月21日条には「来戊年(＝文化11年：筆者註)四月、当寺開山祖師六百年忌法会致修行候、就而ハ常光院依先例妙心寺宿坊ニ相成ハ、然ル処近年余程及破損候様相見へ候、当年中ニ修覆可被加旨申入置候」とあり、文化11年に執り行われる開山栄西の600年忌法会にむけて宿坊となる塔頭の修復などがすすめられていたことが確認できる。

⁴¹大年忌前の諸支出の必要な時期に、寺内が姪子社復興のためとはいえ、あえてこうした銀子を差し出した理由について『建仁寺参暇日記』文化3年(1806)5月10日条には「姪子社勸化之願ニ付、常住より左之通及返答」として「勸化之儀、先達より各々申出候得共、対 公儀相憚候義且不好事故、不得已大年忌前物入多分之時節候へ共、先達而銀子も差出候義御座候（略）右勸化願は氏子より申出候義哉、社番より氏子え申渡ス」とあり、再建勸化を要望する氏子らに対し、公儀を憚り勸化の代案として銀子が下げ渡されたことがわかる。

⁴²社役人の一人、森武右衛門は寛政2年(1790)6月付建仁寺文書12*077「御届申上候口上覚」において「小松町ニ家屋敷并土蔵々所所持仕罷在候処、建物及破損、殊大借ニ而持続かね候（略）弥増ニ困窮仕候ニ付、此度土蔵斗壳払、代銀之内を以、建物修覆仕、并土蔵之跡え小借屋相建、右宿料を以、家屋敷持続申度」と、困窮のあまり破損した家屋の修復もままならず、土蔵を売却し、借屋経営をすることで家屋敷の持続をはかるという状況を建仁寺に届け出ている。

⁴³史料10には続けて「社納物を氏子らに渡すことで」「難儀之筋も可有候哉ニ察候間、常住より当番之者へ米五石ツ>致合力遣候間、左様可相心得候」とあり、「社納物」が米5石に相当するほどの価値を有していたことがわかる。

⁴⁴建仁寺文書12*086

⁴⁵その後建仁寺境内下柳町の年寄らが社地内溝石垣破損の修復を当社へ求めるにあたり認めた文化5年(1808)8月13日付建仁寺文書11*083「乍恐奉願口上書」には「御社御造宮、追々御成就被遊候御儀、難有可奉存候」とあり、普請が進行していたことをうかがわせる。

(2001年9月3日原稿受理、2001年10月30日採用決定)